



ふたりは二人

森村
桂

講談社



ふたりは二人

1967年11月10日 第1刷発行

1968年2月8日 第5刷発行

著 者 森 村 桂

＜同じ著者によって＞

おいで、初恋（講談社刊）

結婚志願（講談社刊）

チャンスがあれば（講談社刊）

違っているかしら（オリオン社刊）

天国にいちばん近い島（学研刊）

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(942)1111(大代表)

振替 東京 3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 320円

Printed in Japan © Katsura Morimura 1967

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ふたりは二人
目次

女酋長さようなら

8

三点セットはダンプにゆられ

24

ああ、結婚第一夜

38

何とかなるさとはじめたが

52

四万円の月給は

66

再び来ましたニューカレドニア

80

さてははかられたか

94

クリスマスはオーストラリアで

110

ああ、スターの夢やぶれ

別居か一千万円の住宅か

オフクロは花のパリ

求む、お手伝いさん

ボーナス入る！

ダンナさまはゴルフだけ

なつかしや、オフクロの声

結婚一周年

132

146

162

176

190

204

218

234

装幀・挿絵 宮田 武彦

ふたりは二人

女酋長さようなら



「もしもし、トン、私もついに結婚することになったのよ」

「ほんと、おめでとう、いつ決ったの」

「今夜よ、今決ったの」

「そう、よかったわね」

親友のトンに報告して、私はぐっすり床に入る。いい気持で眠っていた時だ、ベルがなる。

「はい、もしもし」

「あ、モリ？ トンです。ねえ、さっき何ていった」

「う、うん？ ああ、婚約したって」

「またかつぐ、誰とよ、あなたとは、つい十日前まで毎日ベッタリ逢ってたじゃない、お見合の話も恋愛の話も聞かなかったわよ」

「うん、それがね、その十日前に会った人なのよ」

「え、十日前?! それで、何回会ったの」

「今日で三回目」

トンが驚くのも無理はない。私はこのところ、もう結婚なんかするものか、と固い決意をしていたところなのだ。目下私は二十六、この年になるまで、理想の男性が現れなくて、現れたところで私を理想の女性と思ってくれなくて、どうしてこれから先、適齢期も通りこしたというのに、そういう人が現れる筈があるか、いいさ、いいさ、そっちがその気なら、私しやニカレドニア島に逆もどり、酋長さんとの約束通り、四人の家来をもらって女酋長でいばって暮した方がよっぽどいい。さあてこれからお金を貯めよう、どうやって貯めようかと、トンに相談していたところなのである。

「三回しか会っていない人って、お見合なの?」

トンは信じられないらしくいった。売れ残りとは気の毒なものよ、どんな男でもいいから決めちゃったんだらうと、軽蔑の声がありありと伝わってくる。

「ううん、それが、恋愛なんだ」

「恋愛?! たった三回で、恋愛……」

「そう、一目ぼれってわけね」

「モーリー、どういふ人なの、どこに勤めてるの」

「東都テレビよ」

「そこで何してんの」

「さあ……」

「よしてよモリ、社員なの？」

「でしよう？」

「どの大学、夜間じゃないでしようね」

「さあ……」

「中退じゃないの」

「さあ……」

「いくつ」

「二十七」

「ふーん、お父さんは何してるの」

「さあ……、サラリーマンだと思うけど」

「お家はどこ、どこに住んでるの」

「なんだかね、友だちの団地にころがり込んでるらしい」

「何ですって、モリ、確かな人なの？ 結婚サギじゃないでしようね」

「まさか」

「誰か第三者はいないの、彼のいってることみんなウソだったらどうするの」

「だって、婚約しちゃったもの」

「モリ」

トンはあきれて電話を切った。そんなこといったって、私だって解りやしない、たった三回で、そんなくわしいことが解るわけないじゃないか。私はもう、ボーッとなっちゃっただけなんだ。そうとも、その人はつい十日前、私の家にやってきた、生れてはじめて会った人なんだ。私のニューカレドニアへ行った時の旅行記『天国にいちばん近い島』を読んで、島で私を助けてくれた混血のワタナベ氏の心に感動して、手紙をくれた人なんだ。

会うなり二人は意気投合、私は女酋長になりたいといったし、メガネをかけた山男の彼は、冒険家になりたいといった。山好きのオフクロがやってきて、また意気投合、

「頼もしいわ、私も本格的な山に登りたい」

ときた。そして三回目、喫茶店で彼はいったのだ。

「あの、結婚していただませんか」

「え」

私がどんなにびっくりしたか、胸の中が熱くなって、うれしくてどうしていいか解らなくなつた。

「ぼくは今度の春、ヒマラヤに行く筈でした。でも、冒険家の夢は捨てます。冒険家に家庭はありません」

おお、何たることか、私のために、唯一の冒険の夢を捨てるといふ。こんな人がいままでいただろうか。私は感激して、何かいおうとしたとたん、困ったことに思い至った。

「私、女酋長の夢、捨てられない」

彼はニコリ笑っていった。

「いいじゃないですか。ぼくを家来にすれば」

「そうですね。でも、私、お料理もそうじも苦手なの」

「心配いりません、ぼくは山男です。そんなこと何でも出来ます」

「だけど、私、身体が弱いので、だから、しょっちゅう病氣して……」

「いいじゃないですか、ぼくが丈夫だ」

「だけど、私、そそっかしいの、お皿なんか、よく割っちゃうの」

「安い皿を買います」

「だけど、私、困ったわ」

「まだ、何か困ることがあるんですか」

「いいえ、それが、ないから、私、どうしよう」

「じゃ、結婚しましょう」

となったのである。私のいうこと、何でも心配ないといってくれて、そのうえ女酋長にしてくれるというのなら、何も、はるばる土人島まで都落ちしなくたっていいじゃないか。家来が

ひとりというのはちょっと不満だが、いずれふえるというもんだ。私は、大きくコックリしたのである。

その時になって、

「ちょっと待って下さい、あなたは東都テレビの本当の社員ですか、学校は夜間じゃありませんか、月給は、財産は、前科は……」

などといちいち聞けるかってんだ。第一、向うが、この不美人で、バカかも知れない、兄弟に気狂いがいるかも知れない、借金かかえてフーフーいっているかも知れない、こんな娘に生涯の夢である冒険家の夢をスパッと捨てて、賭けたのだ。もしかしたら、こんな奥さんもらったために、一生を足ひっぱられてウダッが上らないかもしれない、でもそれに賭けたのだ。どうして私だけが、賭けないでいい筈があるか。

いいじゃないか。この人がもしも大ホラふきの大悪人だったところで、あるいは会社で絶対出世しないという折紙をはられていたとこで、この人にボーッとなっちゃったんだ。だましてくれるなら、一生だましつづけてもらおうじゃないか。貧乏暮しは親の代から慣れている。

「あの……、お家の方、許して下さいるかしら」

私はもう一つ、心配ごとを思い出していった。彼は考えこんだ。

「そうだ。兄貴の時は母がとっても反対したんです。ぼく明日行ってきます。でも、心配しないで下さい、ぼくは親が何といおうと、絶対あなたと結婚します」

「はい」

「駆け落ちだろうと、何だろうとします。どんなに反対されようと」

彼は断固たる顔で帰っていった。大丈夫だろうか。今まで何一つ心配ごとをいわなかった彼が、あんなに真剣な顔でいうなんて、私はこの夜、駆け落ちの夢をみた。

翌日である。夕方になって彼はわが家にやってきた。いやに早い、どうしたんだろう。彼はしょんぼりしてる。

「どうだったの、お家の方」

私は心配して聞いた。

「それが……、ぼくはもう悲しくて……」

「どうしたんですか」

これはいよいよ駆け落ちか、それともお別れか……。

「家へ帰って、あなたのこと話したんです、そしたら、何といったと思います」

「さあ……」

「みなまで話も聞かず、そうか、それはよかったって、父も母も大喜びなんです。お前のごへ嫁がくる？ それはありがたい、片手がなかりと片目だろうとバカだろうといい。来てくれるだけでありがたいって」

そしてこの六月十五日、私たちは正式に婚約したのである。